

世界文学全集 39

ヘミングウェイ
誰がために鐘は鳴る

大久保康雄 訳

河出書房

世界文学全集 39 ヘミングウェイ



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和36年1月24日 初版発行

昭和44年10月25日 44版発行

定価 430円

訳者 大久保康雄
発行者 中島隆之
印刷者 多田基
装幀 原 弘

印刷 刷・多田印刷株式会社
製 本・岸田製本紙工業株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397—310139—0961

目 次

誰がために鐘は鳴る……………一

年 譜……………(佐伯彰一) 五五

解 説……………(佐伯彰一) 五〇

誰がために鐘は鳴る

マ－サ・ゲルホーンに

な んびとも一島嶼にては

あらず なんびともみずか

らにして全きはなし ひとつはみな

大陸の一塊 本土のひとつひら そのひとつひら

の土塊を 波のきたりて洗いゆけば 洗われし

だけ欧州の土の失せるは さながらに岬の失せる

ジョン・ダン

なり 汝が友どちや汝みずからの莊園の失せ

るなり なんびとのみまかりゆくもこれに似

て みずからを殺ぐにひとし そは

われもまた人類の一部なれば ゆえ

に問うなかれ 誰がために

鐘は鳴るやと そは汝が

ために鳴るなれば

主要人物

ロバート・ジョーダン スペイン風にロベルトと呼ばれるアメリカの青年。カレッジでスペイン語の教授をしていたが、スペインの内乱によって自由と正義が脅かされるのを黙視できず、義勇軍に身を投じ、ゲリラ隊をひきいて、山中の橋梁爆破に生命を賭ける。

マリア 共和派の村長を父にもったスペイン娘。暴徒のために髪を刈り取られて凌辱されるが、ジブシーの仲間に救われ、山中にかくまわれている。ロバートにひたむきな情熱をよせる。

パブロ 山中の洞窟にひそむジブシーの頭目。かつてゲリラとして活躍したが、寄る年波とともに弱気になり、わが身の安全ばかりをはかっている。ロバートと反目する。

ピラール パブロの妻。熱烈な共和派支持者で勝気なジブシー女。すんで銃をとりゲリラ戦に加わる。臆病風をふかすパブロを軽蔑し、夫にかわってジブシーの頭目となる。

アンゼルモ 文盲の老ジブシー。ロバートの片腕となって橋梁爆破に身を挺する。

つんぽおやじ (エル・ソルド) パブロたちの山寨の近くにいるジブシーの頭目。共和派のゲリラとして活躍。

アグステイン パブロの配下のひとり。命知らずのジブシー。

プリミティヴォ パブロの配下。ジブシー。

フェルナンド パブロの配下。

彼は林のなかの褐色の松葉の散りしいた上に、組みあ
わせた腕にあごをのせて腹ばいになっていた。頭上の高
い松の梢を風が吹きわたっている。山腹は、彼がねてい
るあたりは傾斜がゆるやかだが、そこから下はけわしく
なっていて、山峡をこえて曲がりくねっているアスファ
ルトの道路が、くろぐろと見える。道路に沿って小川が
流れており、山峡のはるか下のほうの流れのほとりに製
材所が見え、落下するダムの水が夏の日ざしのなかで白
く光っている。

「あれがその製材所か？」と彼はきいた。

「そうだがすよ」

「記憶がないな」

「あれは、あんたがここへきてから建ったです。古い
ほうの製材所は山峡のずっと下、うんと下のほうになり
ます」

彼は写真複製の軍用地図を林の地面にひろげて、しき

いに眺めた。老人が、その肩ごしにのぞきこんだ。背の
低い頑固なからだつきの老人で、農夫の着る黒いスモッ
ク（上着）に、鉄みたいにごわごわした灰色のスポンを
はき、縄底（なづこ）の靴をはいていた。山を登ってきたので、足
かいが荒く、ふたりが運んできた二つの大きな荷物の一
つに片手をして休んでいた。

「すると橋はここからは見えないわけだね」

「さよう」老人が言った。「このへんは山峡でも楽なと
ころで、川の流れも、ゆるやかになってしましてな。下
の道路が木立ちのなかに曲がりこんで見えなくなってい
るあたりで、川が急に落ちこんで、けわしい峡谷になっ
ていて——」

「おぼえている」

「橋は、その峡谷にかかっていますすだよ」

「それで、やつらの哨所は、どこどこにあるのかね？」

「あすこに見えるあの製材所に一つあります」

このあたりの地帯を調べていた若い男は、色のあせた
カーキ色のフランネルのワイシャツのポケットから双眼
鏡をとりだし、ハンカチでレンズをふき、接眼部をまわ
していたが、やがて製材所の板が急にはっきりと映って
きた。扉のわきの木のベンチ、回転のこぎりのある差掛
け小屋の背後にすみあげてある山のようなおがくず、川
の対岸の山腹から材木を流しこむ用水路などが見えた。

眼鏡にうつる流れは、澄んで、なめらかに見え、落下する水の波紋の下で、ダムからの水の飛沫が風に吹きとんでいた。

「歩哨はひとりもないようだな」

「煙が製材小屋からあがっているし」と老人が言った。

「それに綱に服がかかっておりますぜ」

「それは見えるが、歩哨の姿は見えない」

「きつと、やつこさん、日陰にいるだよ」と老人は説明した。「あすこは、いまじぶん暑いだからね。わしらには見えねえ陰にはいりこんでいるんでがしょう」

「そうかもしれないな。つぎの哨所は、どこにあるんだ？」

「橋の下でさ。この峠から五キロくだった道路工夫の小屋にありますだよ」

「あそこには幾人くらいいるのかね？」と彼は製材所を指さした。

「兵が四人に伍長がひとりくらいなもんでがしょう」

「それで、下のほうには？」

「もつといますでしような。あとで、たしかめてきましよう」

「それから橋のところには？」

「いつもふたりいますだ。両端にひとりずつな」

「おれたちも若干必要だが」と彼は言った。「何人くら

い集められるかね？」

「何人でも、あんたのほしただけ集められますだよ」老人が言った。「いまは、この山にも大勢おりますでな」

「どれくらいいるかね？」

「百人以上いるでがしような。けれども、みんな小部隊にわかれていますでね。どれくらい必要なんですかい？」

「それは橋を調べた上でいうことにしよう」

「橋のほうは、いまずぐ調べたいのですかね？」

「いや、さしあたっては、この爆薬をいよいよというときまでかくしておく場所へ行ってみたい。できるなら、橋から三十分以内の距離のところに、もっとも安全にかくしておきたいのだ」

「そいつはわけありませんや」と老人が言った。「わしらの目的地から、その橋までは、ずっと下り坂になっていきますでな。だが、いまそこへ行きつくには、ちっとばかり馬力をかけて登らにやらねえですよ。腹はすきなすったかね？」

「すいている」若い男は言った。「だが食事はあとまわしだ。ところで、きみは、なんという名前だったかな。忘れたよ」

忘れたというのが老人にはおもしろくなかった。

「アンセルモ」老人が言った。「アンセルモと呼ばれて

いましてな。バルコ・デ・アビラの人間でがすよ。その荷物、かつがしてあげましょう」

若い男は、上背があり、やせていて、日光が縞になつて当たっている頭髮が美しく、風雨にきたえられた日やけた顔を、日に色あせたフランネルのワイシャツに百姓ズボンをはき、細底の靴をはいており、身をかがめて包みの革紐の一つに片腕を通すと、重い荷物を、ぐいと肩にほうりあげた。それから、片方の革紐にも腕を通して荷物の重みを背中に安定させた。さっきまで荷物があたっていた部分のワイシャツが、まだ汗で濡れていた。「さあ、かついだぞ」と彼は言った。「どう行くのかね？」

「のぼるんでさ」アンセルモが言った。

荷物の重みに身をかがめ、汗をかきながら、ふたりは山腹いちめんに生いしげっている松林のなかを、しっかりと足どりでのぼって行った。踏みつけ道らしいものは、若い男には一つも見わけられなかったが、しかしふたりは骨を折つてのぼって行き、山の斜面をまわり、やがて小さな流れを渡つた。老人は頭丈な足どりで、さきに立って流れの岩床の端をのぼって行った。のぼりは、いよいよけわしく、いっそう骨が折れてきたが、それでもやっと、頭上にそそり立つ、つるつるした花崗岩の岩棚の端の向こうで流れが急に落ちこんでいるらしいとこ

ろへ出た。老人は、岩棚の根もとで若い男が追いついてくるのを待った。

「大丈夫だかね？」

「大丈夫だ」と若い男は言った。ひどい汗で、腿の筋肉が、けわしい傾斜をのぼってきたため、びくびくけいれんしていた。

「とにかく、ここで待ってておくんない。さきへ行つて連中に注意してきますだよ。あんただって、そんな代物を背負つて鉄砲弾をくらいたくはねえでしょうからね」

「冗談にもごめんだよ」と若い男は言った。「遠いのか？」

「すぐそこでさ。連中は、あんたのことを、なんと呼んでるだね？」

「ロベルトと言っている」と若い男は答えた。彼は荷物をずりおろすと、川床の側の二つの丸石のあいだに、そつとおいた。

「それじゃ、ロベルト、ここで待ってておくんない。すぐまたもどってきますでな」

「よし」と若い男は言った。「しかし、きみはこの道をおりて橋のところまで行くつもりか？」

「いんや。橋へ行くときにや、もう一つの道を行くだよ。そのほうが近くて楽でな」

「橋からあまり遠いところへ、これをしまっておきたくはないんだがな」

「あとでわかるだよ。そこがあんたの気にいらなけりや、また別のところをさがすさ」

「そうしよう」と若い男が言った。

彼は荷物のそばに腰をおろして、老人が岩棚をのぼって行くのを、じっと見まもっていた。のぼりにくいところではなかった。べつだん探しもせずに手がかりを見つけて行くそのやりくちから、老人が、以前、幾度となくそこをのぼったことのあるのが、若い男にもわかった。しかも、だれがのぼったにしろ、彼らは、ひどく注意深く、なに一つ痕跡を残してはいないのだ。

若い男は、ロバート・ジョーダンという名であつたが、おそろしく空腹を感じ、それに不安でもあつた。飢えをおぼえたことは何度もあるが、不安を感じるというのは、ふだんないことだった。というのは、自分の身に何がふりかかるかということは、気にかけるほどのことでもなく、また、この地方一帯の敵の前線の背後で行動するのが、しごく造作のないことは、これまでの経験で知っていたからである。よい案内人さえあれば、敵の背後で行動することも、敵中を横断することも、造作のない点では同じだった。たとえ行動を困難ならしめる事態におちいったにしても、それはただ、わが身に起こつた

出来事にもつたいをつけるだけのことだった。それだけのことで、あとはただ信頼すべき人間を選びさえすればいいのだ。いっしょに仕事をする人間を、全面的に信頼するか、それとも全然信頼しないか、いずれかにしなければならず、そして信頼するについては決断が必要だった。彼は、すこしも、そんなことに気をもんでいたのではなかった。問題は、ほかにあつたのである。

アンセルモは、いい案内人だつたし、山のなかを旅することにかけては、おどろくほど達者だつた。ロバート・ジョーダンも歩くのは達者だつたが、夜明け前から老人について歩きまわって、この男に本気で歩かれたら、こっちがくたばるとわかつた。ロバート・ジョーダンは、これまでのところ、このアンセルモという人間を、万事につけて信頼していた。ただし判断力については別である。まだ老人の判断力をためしてみる機会がなかったからだ。が、どのみち判断は、こっちの責任になっているのだ。いや、彼が気にやんでいるのは、アンセルモに関するものではなかった。また橋梁きょうりょうの一件にしても、他の多くの問題以上にむずかしいことではなかった。彼は、どんな種類の橋梁であろうと、指定されたものを爆破する方法を知っているし、事実また、大小さまざまな構造の橋梁を爆破してきているのである。たとえば、その橋がアンセルモの報告より二倍も大きいとして

も、二個の荷物のなかには、それを見事に吹っとばすに十分な爆薬と装置一式とが用意されているのだ。というのも、その橋は、一九三三年、彼が徒歩旅行でラ・グラシハへ行く途中渡ったことがあるので記憶にのこっているし、また一昨夜、エスコリアル宮の外の家の、あの二階の部屋で、ゴルツから、その橋の説明を読んできかされていたからである。

「橋を爆破すること自体は、意味のないことなのだ」頭の毛を剃りあげた傷痕のある頭の上にランプが光り、鉛筆で大地図の上を指しながら、ゴルツは言ったのである。「わかるな？」

「わかります」

「全然ばかげたことだ。ただ橋を爆破するだけでは失敗なのだよ」

「おっしゃるとおりです、閣下」

「攻撃のためにさだめられた時間にもとづいて、指示された時刻に橋を爆破するということは、いかにしてそれをやるべきかということなのだ。それは、きみにも当然わかるだろう。それが、きみの権利なのだし、爆破すべき方法なのだからね」

ゴルツは鉛筆に視線を落とし、それから、それで歯をこつこつとたたいた。

ロバート・ジョーダンは何も言わなかった。

「きみにはわかっているな、それがきみの権利であり、いかに行なうべきかということは」ゴルツは彼を見、うなずき、言葉をつづけた。ついで地図を鉛筆でたたいた。「つまりそれは、わしがいかにそれを行なうべきかということであり、またそれは、われわれが何を手に入れることができないかということなのだ」

「なぜですか、閣下？」

「なぜ？」とゴルツは憤然と言った。「きみは幾度となく攻撃を見たことがあるくせに、なぜかなどと、そのわけをわしにきくのか。わしの命令が変更されないことを保障するものはなんだ？ 攻撃が取り消されないことを保障するものはなんだ？ 攻撃が延期されないことを保障するものはなんだ？ 開始さるべきときから六時間以内に攻撃が開始されることを保障するものはなんだ？ いったい、これまでの攻撃で予定どおりに行なわれたものがあるかね？」

「あなたの攻撃なら時間どおりに開始されますよ」とロバート・ジョーダンは言った。

「ところが、これは、わしの攻撃ではないのだ」ゴルツが言った。「なるほど攻撃を行なうのはわしだが、しかし、それはわしのものではない。砲にしても、わしのもではない。砲は、わしが要求しなければくれないのだ。彼らは、派遣すべき砲兵隊があるときでさえ、わし

の要求するものを、よこしてくれたためしがない。こんなことは、ほんの一例だ。このほか、いろんなことがあるのだ。あいつらが、どんな連中か、きみも知っているだろう。いちいちあげつらう必要もないことだ。いつも何かがあるのだ。いつも、だれかが邪魔をするのだ。だからこんどは、きみも、しつかりのみにこんでいてもらいたいのだ」

「すると、橋の爆破は、いつやればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはいいた。

「攻撃開始後だ。攻撃開始の直後、それ以前ではいけない。そうすれば、増援部隊が、この道をのぼってやっこないだろうからね」彼は鉛筆で指した。「なにものにも、この道をのぼってこさせてはならぬのだ」

「それで、攻撃はいつですか？」

「それは、いづれ教える。だが、その日時は、ただ攻撃の可能性を示すものとして利用してもらいたい。そのときこそなえて準備してもらわなければならぬ。攻撃が開始されてから、きみは橋を爆破するのだ。いいかね」彼は鉛筆で指し示した。「やつらが増援部隊をもってこられるのは、この道しかない。やつらが戦車や砲を運びあげることができるのも、あるいはトラックを山ごえの間に動かすことができるのも、この道しかない。わしは、その間道を攻撃するのだ。わしは橋が吹っこんでし

まっていることを知らなければならぬ。攻撃の前では、だめだ。前にやったのでは、攻撃が延期された場合、修理ができる。絶対に前ではいかん。攻撃がはじまったときに爆破しなければならぬ。そして、橋のなくなったことが、わしに、はつきりしていなければならぬ。いま哨兵は、ふたりしかいない。きみといっしょに行く男は、ちやうどそこからきたばかりの人間だ。なかなか頼もしいやつだそうだ。いづれ、きみにもわかるだろう。その男は山のなかに仲間をもっている。きみが必要とするだけの人数をとりたまえ。人数は、できるだけすくなく、しかし必要なだけ十分使ってもらいたい。こんなことを、きみにくどくどいうにもおよばぬだろうが」

「そこで、攻撃の開始されたことを、わたしはどうして判断すればよろしいのですか？」

「攻撃は全師団を動員して行なわれる予定だ。準備行動として、まず空爆をやる。きみは、まさかついぽではあるまい？」

「では飛行機が爆弾を投下したら攻撃が開始されたものと考えてよろしいのですか？」

「いつもそうだと考えてもらっては困る」とゴルトツは言い、首を横にふった。「だが、こんど場合は、そう考えてよろしい。それがわしの攻撃だ」

「わかりました」とロバート・ジョーダンは言った。

「どうも、あまり好ましい仕事ではなさそうですが」

「わしだつてそうだよ。手を出したくなかったら、いまのうちに、そう言ってもらいたい。手に負えぬと思うんなら、いまのうちに、そう言ってもらいたい」

「やります」ロバート・ジョーダンと言った。「りっぱにやりとげます」

「わしにとって何より肝心なのは知ることだ」ゴルツが言った。「つまり、何ものをも、あの橋を渡らせてはならないのだ。これは絶対に大切なことだ」

「わかりました」

「わしは人に、こんなことを、こんなふうに頼むのは好まぬ」とゴルツは言葉をつづける。「きみに、これをやれと命令することが、わしにはできなかった。きみが、いやでも、わしのさだめたこういう条件をやりぬかなければならぬことになるかもしれぬ、ということとはわかる。わしは、きみに納得がいくように、そして、あらゆる可能な困難や重要性がのみこめるようにと、きわめて慎重に説明しているのだ」

「それで、もしあの橋が爆破されたら、あなたは、どんなふうにして、ラ・グランハへ前進するのですか？」

「われわれは、あの山ごえの間道を総攻撃してから、橋を修理する準備をととのえて前進する。これは、きわめて複雑にして見事な作戦なのだ。従来のにくらべて、ま

さるとも劣らぬほど複雑にして見事な作戦なのだ。作戦計画はマドリッドでたてられたのだ。これは、あの世に出ぬ教授ビセンテ・ロボの傑作のなかの、いま一つの傑作なのだ。わしがその攻撃を起こすのだが、例によって不足の兵力でやるわけだ。だが、それにもかかわらず、これはきわめて可能性のある作戦なのだ。この作戦については、わしは、いつもよりも非常に楽しみにしている。あの橋が爆破されれば作戦は成功する。セゴビアを占領できるのだ。見たまえ、どういうふうにするかを教えてあげよう。いいかね、われわれが攻撃するのは問道の頂上ではない。ここを確保してしまうのだ。ずっと向こうだよ。ほら——ここだ——こんなふうに——」

「いや、かえって、うかがわないほうがよさそうです」ロバート・ジョーダンは言った。

「なるほど」ゴルツは言った。「向こう側へかついで行くにしても、たいした荷物にもならないと思うがね」

「いつもわたしは、作戦のことは、むしろ知りたくないのです。そうすれば、たとえどんなことが起こっても、わたしがとやかく言われることはありませんからね」

「それは、かえって知らないほうがいいさ」ゴルツは鉛筆で額をなでた。「わしのほうが何倍か知りたくない気持ちだよ。だが、きみは、橋のことについて知っていなければならぬことだけは心得ているだろうな？」

「それは知っています」

「わかつてくれているものと、わしは信じる」ゴルツが言った。「わしは、きみに向かつてお談義をするつもりは、すこしもない。まあ一杯やろうじゃないか。やたらとしゃべったので、のどがからからだよ、同志ホルダン。きみの名前はスペイン語でよぶと変わっているな、同志ホルダウン」

「あなたのゴルツは、スペイン語では、どう発音するのですか、閣下？」

「ホツツェだ」と、ゴルツは、にやにやしながら、まるでひどい風邪で咳きこんででもいるかのように、のどの奥のほうで声を出した。「ホツツェ」と彼は、のど声で言った。「同志ホツツェ將軍だ。スペイン語でゴルツをどう発音するか、前からわかつておったら、ここの戦争にくるまえに、もっといい名前を選びだしていただろうがね。師団の指揮をとるようになって、なんでも自分の好きな名前をつけられると思うときになって、よりによってホツツェではね。ホツツェ將軍か。いまではもう変えたいにも手おくれさ。バルチザンの仕事を、きみはどう思うかね？」バルチザンというのは、前線後方のゲリラ作戦をあらわすロシア語である。

「非常に気に入っていますよ」とロバート・ジョーダンは言って、にやにや笑った。「戸外の空気のなかで、す

こぶる健康的です」

「わしも、きみの年ごろには非常に好きだった」とゴルツが言った。「みんなの話だと、きみは橋梁爆破の名人だそうだね。非常に科学的にやるというじゃないか。こいつは単にうわさだがね。きみの仕事ぶりを、まだ一度もこの目で見たことがないのでね。もしかしたら、まだ実際には何もやっていないのじゃないのか。きみは、ほんとうに爆破するのかね？」こんどは、からかう調子になっていた。「こいつを一杯やりたまえ」彼はスペイン産ブランドーのグラスをロバート・ジョーダンに渡した。「ほんとうにきみはやるのかね、橋梁爆破を？」

「ときたまね」

「こんどの橋では、ときたまなんてことは、願いさげにしたほうがいいだろうな。いや、あの橋のことをいうのはよそう。あの橋のことは、もうきみには十分わかっている。われわれは、まったく真剣なのだ。だから、とんだひどい冗談もとばせるというわけさ。ところで、戦線のあちら側には女の子がたくさんいるかね？」

「いや、女の子と遊ぶひまなんかありませんよ」

「そういう考えかたは、どうかと思うね。軍務が不規則になればなるほど、生活も不規則になるものだ。きみの仕事は、ひどく不規則だ。それに、きみは散髪が必要があるようだな」

「自分の散髪は必要に応じてやります」とロバート・ジョーダンと言った。頭をゴルツのように剃られるのではたまらないと思ったのであろう。「女の子がいなくても、わたしには、いろいろと考えることがありますよ」と彼は、ふきげんな顔をして言った。

「わたしはどういう制服を着ればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはきいた。

「制服なんかいらんよ」ゴルツが言った。「きみの散髪も、どうだっていい。からかっただけさ。きみという男は、わしとは、だいぶちがつているようだな」ゴルツはそう言って、また二つのグラスに酒をなみなみとついだ。

「きみは決して女のことだけを考へてはいない。わしは、女のこととは、これっぽかりも考へぬ。考へるわけがないじゃないか。わしはソヴィエティク(革命派)の將軍だものな。絶対に考へんよ。わしを毘(むち)にかけて考へさせてみようなどとしてくれるなよ」

いすに腰かけ、製図板の上の地図にかがみこんで仕事をしていた幕僚のひとりが、彼に向かって何かどなった。ロバート・ジョーダンにはわからない言葉だった。

「黙れ」とゴルツは英語で言った。「わしは、よたをとばしたかったら勝手にとばす。わしは非常に真剣なのだ。だから冗談もいえるんじゃないか。さあ、こいつをあけ

て、それから出かけたまえ。わかっただろうな？」
「はい」とロバート・ジョーダンは言った。「わかりました」

ふたりは握手をかわした。彼は一礼して外へ出て、参謀用の自動車のところへ行った。自動車のなかでは例の老人が居眠りをしながら待っていた。その車で彼らはグアダラーマをすぎる道路をとばして行った。老人はまだ眠りこんでいた。ナバセラーダ街道をのぼり、アルバイン・クラブの小屋に乗りつけ、そこで彼ロバート・ジョーダンも三時間ほど睡眠をとり、それから出発したのであった。

彼がゴルツと会ったのは、それが最後だった。決して日やけすることのない異様なほど白い顔、鷲(わし)のような目、大きな鼻、薄いくちびる、横じわと傷痕のある坊主頭の男だった。明日の晩は、彼らはエスコリアル宮の外、まっ暗闇(くらやみ)の街道を進軍しているだろう。闇夜のなかに、歩兵をのせたトラックの長蛇の列、重い装備をしてトラックによじのぼる兵隊、トラックに機関銃をかつぎあげる機関銃隊、戦車運搬用の車体の長いトラックの上へ渡し板を使って運びこまれる戦車、山ごえの間道攻撃に向かって闇夜をついて出動する師団。そんなことは考えまい。そんなことは彼のあずかり知らぬことだ。それはゴルツのやるべき仕事だ。彼のやるべきことは、ただ